

8月末の台風が秋を連れてきたようで、だいぶ涼しくなってきました。しかし今年も厳しい暑さでした。

数年前に中古で購入したマイカーのエアコンの効きが思わしくなく、衣を着ての運転がこたえました。私は15年程前一人でインドにいった事がありますが、インドは5・6月が最も暑いといわれており私が行った月が5月でしたのでその当時、日本とは違う猛烈な暑さに何か体がとけそうな思いをしたことを鮮明に覚えております。その事を思い出し同時にふと思ったのは「お釈迦様もやっぱり暑かったのかなあ…？」と。どう思われますか？

「そんなお釈迦様とはいえ、暑いに決まってるだろう！」と叱られそうですが、しかしよく考えてみますとお釈迦様がインドで仏教を広めるため歩かれた時期は、お悟りを開かれた後の事です。お悟りの境地というのは『涅槃寂靜』<sup>ねはんじやくじょう</sup>といい煩惱がなくなり苦しみの無い境地といわれております。そうしますと夏の猛暑も私たちが感じている暑さとお釈迦様が感じている暑さとは意味が違うのではないかと

と思います。私たちが感じている暑さは言葉を変えると「不快感」という感覚によるものではないでしょうか。猛暑の時「今日は心地いいですねえ」という人はいないと思います。そういう人に出遭ったら「ちょっと変わった人だなあ」ということになるのではないのでしょうか。

「猛暑の日」というのは私たちにとって「暑く不快な日」と言い換えることもできるのではないのでしょうか。

さて「不快」ということはまたことばを変えると「苦しい」という意味もあると思います。

お釈迦様がお悟りを開かれる前に一番の問題にされたことが「人はなぜ苦しむのだろうか」ということでした。そして29歳の時インドのブッダガヤの菩提樹の下でついにその問題の解決にいたりお悟りを開かれました。『涅槃寂靜』の境地に至ったわけです。その後最初に説かれたお言葉が『苦諦・集諦・滅諦・道諦』<sup>くたい・じつたい・めつたい・どうたい</sup>といわれる4つの真理でした。その中の『集諦(じつたい)』が私たちが苦しいと感じる根本だと説かれました。この根本がいわゆる「煩惱」

といわれているものです。そして『滅諦(めつたい)』といわれるのが「苦しみの根本である煩惱を滅する」という意味があり、その煩惱を滅する為の手段・方法である『道諦(どうたい)』を説かれました。そして最終的に到達できる境地が『涅槃寂靜』といわれるお悟りの境地です。

そのように仏教の教えから考えたとき先程の「お釈迦様は猛暑をどう感じていらっしたか？」ということが簡単には答えられない問題になるのではないかと思います。

ただ一つ明確なことは、情をかかえ苦しみの中で生きているわたしたちにお釈迦様のお悟りの境地は解らないということだけです。しかし浄土真宗では『大慈悲』というおことばがあり「解らないままでかまわない。ただ我をたのめ」とおっしゃる阿弥陀様からのおこころ「南無阿弥陀仏」が届いています。この言葉一つを頼りに苦しみの中を生き抜いてゆくのが念仏の行者であり『涅槃寂靜』に到らせてくださいます。

南無阿弥陀仏